

熊山遺跡と秦氏・和気一族のかかわり

熊山遺跡調査・研究会
副会長 岡野進

郷土の象徴としての伝説、伝承を元に、熊山と秦氏・和気一族のかかわりを考察します。なお、見識ある皆様のご批判、ご指導をお願いできれば幸いです。

南に高くそびえる霊峰熊山は、千古の歴史を秘め、備前唯一の神仙の拠点として古代から栄え。7世紀頃には古墳、石積遺跡、寺院など造られたが、その頃この山は誰の私有か、又、どんな勢力の権限が及んでいたかが問題であると考えます。

古代、熊山の南麓の(現)香登地区に大変強い権力集団秦氏がいた。秦氏一族は鉄、銅等の採鉱及び精錬、薬草の知識、蚕を育て絹織物を考案する等、大変、産業技術に優れていた。又、土木工事についても、井戸、池、橋など灌漑施設等の造営技法に優れていて、総社市の鬼ノ城などを築いた秦氏は香登の南、鶴山丸山古墳に葬られている、という言い伝えがある。

昔、美作の國は奈良の都と出雲國の中程になり、多くの人で栄えた所と言われている。タタラ遺跡の多い美作の國で和気氏一族は鉄、銅を採取し勢力を蓄えた。刀を造るようになってから、砂鉄を求めて、吉井川を下り、熊山橋上流500mの(現)吉原地区に来られた。

砂鉄がよく採集できた場所は、上流から、益原、田原上、田原下、大田原、原上、原下、奥吉原、吉原、河田原、多々原。と約10kmの間に10ヶ所、原が続いている。その時期、約西暦750年頃である。

そして、和気氏は政治活動にも活発だった様で、後には朝廷の使族になっている。使族となると、当主の長男か長女どちらかが召使いとして朝廷に仕える事となり、姉の和気広虫は14才で、弟の清麻呂は11才頃、奈良の都に上った。そして、姉弟二人は孝謙天皇の信賴篤き官人となり、出世して行くが、清麻呂

35 才頃、弓削道鏡事件が起こる。姉の広虫に代わって、道鏡を天皇にせよと言う宇佐八幡の神託を調査し、答えは、道鏡を天皇の位につけてはならない、と朝廷に報告した。その結果、広虫と清麻呂は称徳天皇(元孝謙天皇)と道鏡の怒りをかい、流罪されるが、称徳天皇崩御後、道鏡失脚して、許されて都に帰り官人として復帰する。そして、播磨、豊前の国司。和気郡(ワケゴウリ)、磐梨郡(イワナシゴウリ)の國造り、郡長などを歴任し、後には、遷移した平城京で桓武天皇の信頼篤い、優秀な官人として数々の働きをする。

清麻呂の父を中心とした一族は、吉原地区近辺の猿喰池製鉄遺跡を始め、この他 4ヶ所あるタタラ遺跡で、銅、鉄の精錬、砂鉄による刀鍛冶を活発に行っていたと思われる。それらの作業には、炭火が多くいるので、和気一族は政治力を使って、熊山の和気郡(ワケゴウリ)内の入会権(イリアイケン)を得、木炭を生産していた。

熊山の大きな谷には、炭焼き窯の遺跡が数多く残っている。そして、入会権のある和気氏が熊山に仏教をも誘致したと考える。熊山遺跡やお寺については、次の会で説明します。

和気一族の古墳群は、和気氏邸宅跡から東南約 300m にある大谷山古墳(長辺 28m、短辺 21m)の大きさと額山(ヒタイヤマ)ともいい清麻呂の父を祭っている。その下に墓林という土地が在り、墓が多数ある。清麻呂の古墳は武宮古墳だと言い伝えられ、その下に武宮宿禰(タケミヤノスクネ)を祭っている。日本書紀の中に清麻呂は輔治能真人(フジノノマヒト)、和気一族 21 人には輔治能宿禰(フジノノスクネ)の位を賜ったと記されている。現在も吉原区の氏神様として祭られている。

その他、清麻呂の姉、広虫は尼さんになり沢原(現在の広虫荘に近い所)に帰り、老人や子供の世話をした。・大谷山古墳、武宮古墳、猿喰池遺跡は三角に結ばれている。・美作の国から舟で鉾石を運んだ。などと言う伝承が残っている。

霊峰熊山の北に和気氏、南に秦氏が共に力を合わせ、石積遺跡やお寺を造る事に協力したと思われる。又、熊山の北を通過していた大化の官道山陽道が南に移った室町期以降は、片上、伊部、香カ登、長船、福岡と続き、どの町も栄え

た。又、吉井川の高瀬舟は、北へは美作、柵原、和気へ。南へは福岡、西大寺、児島、四国へ。福岡の港からは海舟になっていた。

熊山霊仙寺の守護神として祭られていた熊山石造大権現は神仏混合であり、江戸期には四国の金比羅権現、児島の由加権現、西大寺権現、と定期舟で毎日結ばれていて、大勢の参拝客で賑わったと伝えられている。坂根の登山口から、頂上の熊山権現まで、一丁目ごとに計 45 丁の道案内の石碑が建てられている。

